## 日本武尊能褒野墓鳥居改築工事箇所の立会調査

本墓は、三重県亀山市田村町にある全長90mの前方後円墳で、安楽川の北側河岸段丘の縁辺部に築造されている。墓前には鳥居が立てられているが、経年の腐朽により改築することとなったため、平成14年１月28日～２月１日の間、本部職員ならびに畝傍陵墓監区事務所職員が鳥居基礎埋設箇所の調査を行った。

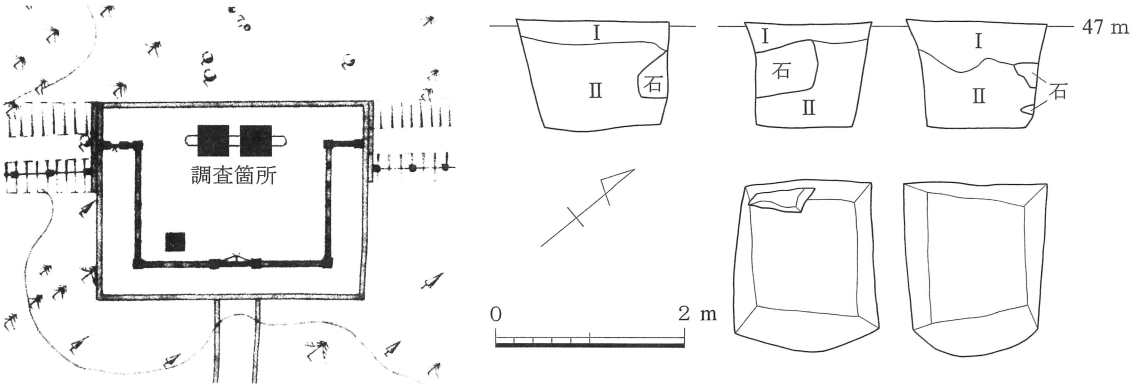
鳥居は同じ場所での改築であり、1.5m四方、深さ1.2mのトレンチを２箇所設定した（第28図）。掘削の結果、断面で２層を確認した。Ⅰ層は、現拝所整備の盛土と考えられる砂質土である。Ⅱ層は、大きな石や破砕されたコンクリートブロックが大量に含まれた砂礫層で、既設鳥居の埋め戻し土であろう。掘削箇所からの遺物の出土はなかった。

上記の結果を踏まえ、工事は予定通り実施した。

調査期間中、墳丘を巡回中に第29図に示した地点に露出した埴輪83片を採集した。また、書陵部には、伊勢湾台風によって生じた根起き箇所から、昭和34年に採集された埴輪３片が所蔵されている。以下に併せて報告したい。昭和34年のものは３点すべて、今回採集品は、突帯の残るものを中心に21点、計24点を図化した（第30図）。

昭和34年採集品（第30図１～３　図版11―７）

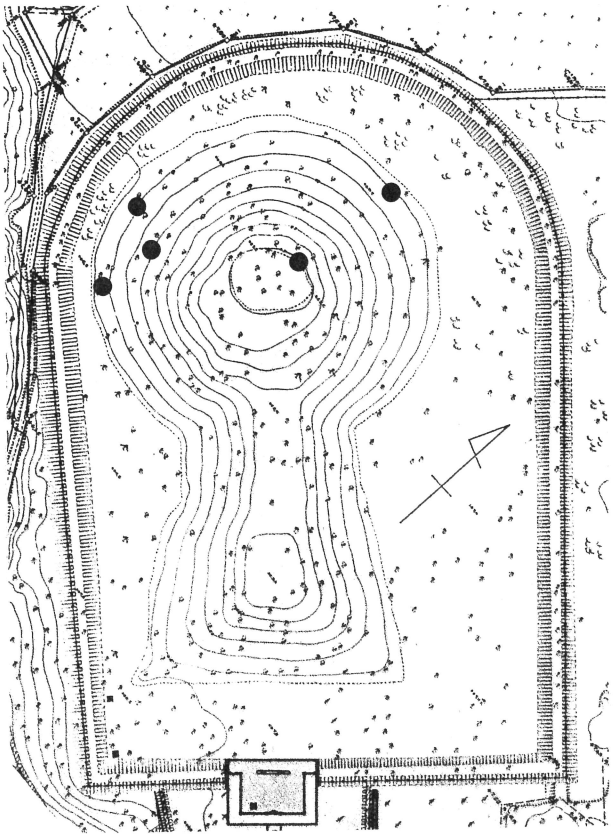
１は鰭付円筒埴輪の口縁部の破片である。前方部北東隅で採集されている。径全体の６分の１程度で、最上段の突帯を含み、端部から15cmまでが残存する。口縁は直立に近いが、緩やかに外反する形態を示す。器壁は胴部付近では0.7cmだが、口縁にいくほど厚みを増し、端部付近では1.2cmとなる。端面は強くなでられており、凹線状の窪みが形成されている。また、口縁端部から突帯までの間隔は８cmである。突帯は均整のとれた断面M字形を呈する。鰭は接合部付近を残して失われており、幅や形状は不明である。鰭の接合の際、突帯を切り取ったかどうかも、現状での観察はできない。外面調整は、突帯より上は横方向の板ナデ、突帯より下は縦方向の板ナデで、明瞭なハケメは認められない。切り合い関係は不明瞭だが、縦方向の板ナデ調整をしたうえに、突帯接合の後、口縁部にのみ横方向の板ナデ調整を施したものと考えられる。内面調整は、縦あるいは斜め方向の指ナデの後、突帯接合部付近に横方向の板ナデ調整、口縁端部に横方向の指ナデ調整が施されている。




第 28 図　能褒野墓　立会調査箇所位置図（1/400）及び平面図・断面図（1/80）

２は円筒埴輪の底部の破片である。前方部北東隅で採集されている。底径全体の６分の１程度で高さ13cmまで残存するが、第１段突帯には至らない。ほぼ直立しており、幅８cmの粘土板で成形し、薄い箇所の内面に補充粘土を継ぎ足している状況が観察される。底面は平滑であり、平らな板か台の上で製作されたものと考えられる。外面は縦方向の板ナデであるが、口縁部の破片に比べると、細かいハケメを確認できる。内面は縦方向の指ナデである。また、外面には棒状工具による刺突痕が１箇所認められる。

なお、１・２は採集位置がほぼ同じであり、焼成が良好で堅緻な点、ともに明黄褐色を呈するなど、特徴がよく一致している。両者は同一個体の可能性が考えられる。

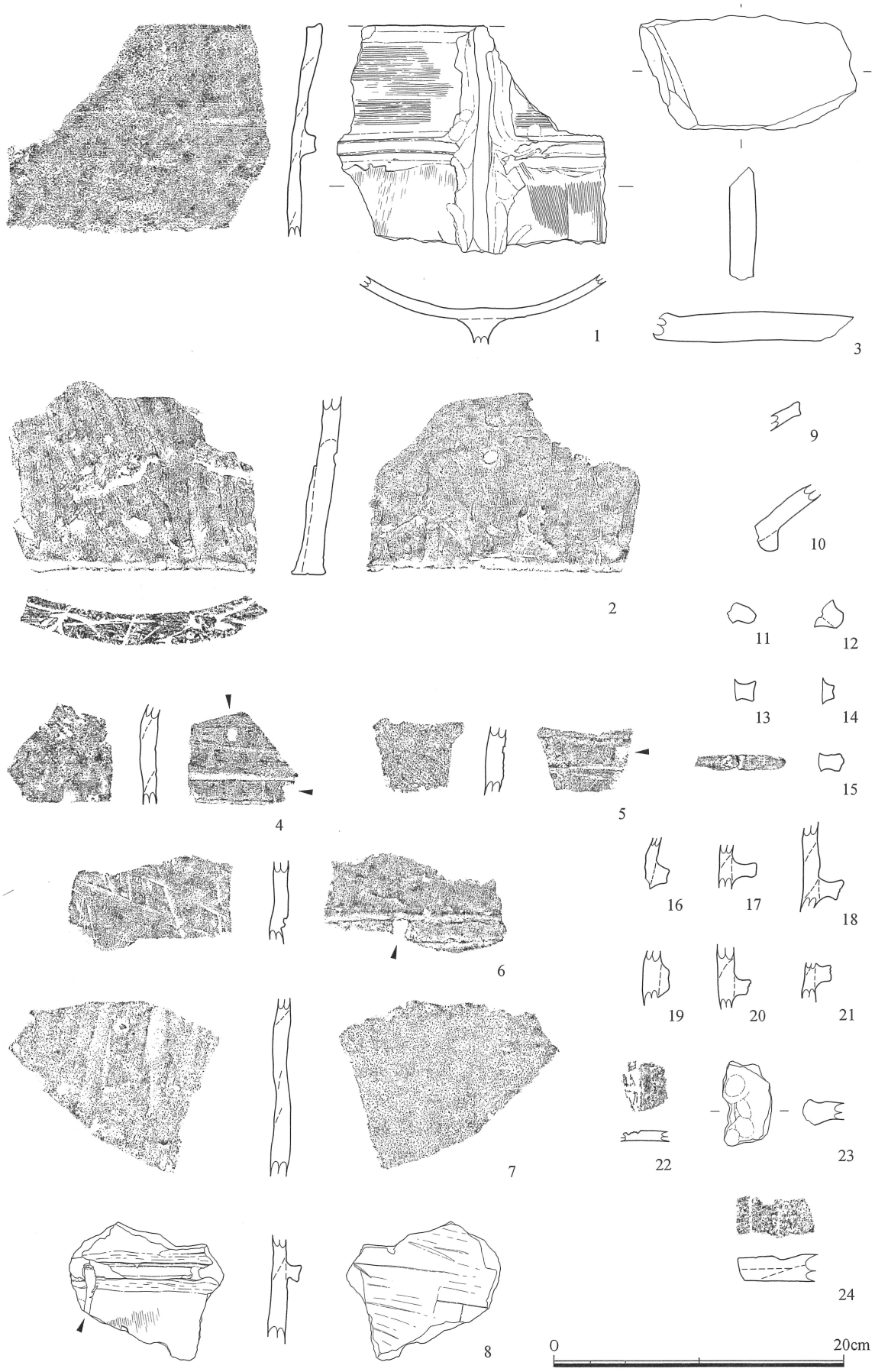


第29図　能褒野墓　埴輪採集箇所位置図（1/1200）

３は形象埴輪の一部と考えられる板状の破片である。後円部北裾で採集されている。厚さも1.7cmと他の埴輪に比べると際だって厚い。家形埴輪の壁と考えることができるが、図示したように、左側端部は屈曲が認められ、その屈曲部は斜めになっている。これらの特徴から、破風板の根元部分の破片と考えることもでき、その場合、切妻もしくは入母屋造の家形埴輪の屋根に相当する可能性がある。内外面の調整は、摩滅のため明らかにし得ない。

平成14年（今回調査）採集品（第30図４～24）

今回採集したものは胴部の破片が多く、口縁部や底部にあたるものは、ほとんど含まれていない。破片の大きさも、昭和34年採集品に比べると細片が多い。４～６は突帯が剥離した破片で、剥離面に突帯接合技法として刺突痕（図中▲部）が確認できる。刺突痕には、断面長方形の棒状工具を用いて、比較的浅く、ほぼ正面から施しているもの（４上･５）と、同じく断面長方形の棒状工具を用いて、比較的深く、やや下方から施しているもの（４下･６･８）の２種類がある。７・８は比較的大きな胴部片である。４～８の外面調整は、指ナデ（４）か板ナデ（８）が施されている。破片全体を通して、顕著なハケメ調整は少ない。内面調整は、指ナデ（４･７）か板ナデに大きく分かれ、５は比較的明瞭なハケメが観察される。また、６･８は板状工具の角が当たったと思われる痕跡が明瞭に残っている。やはり、顕著なハケメ調整は少ない。９～12は朝顔形埴輪の破片と考えられる。９は口縁端部、10は２次口縁の基部、11･12は２次口縁基部に廻る突帯と考えられる。13～21は、突帯の断面形態のバリエーションを提示した。比較的突出度の高いものが多く、突帯先端の上・下端が突出する特徴を指摘できよう。22・23は鰭付埴輪の破片であ




第 30 図　能褒野墓　採集品実測図（1/4）

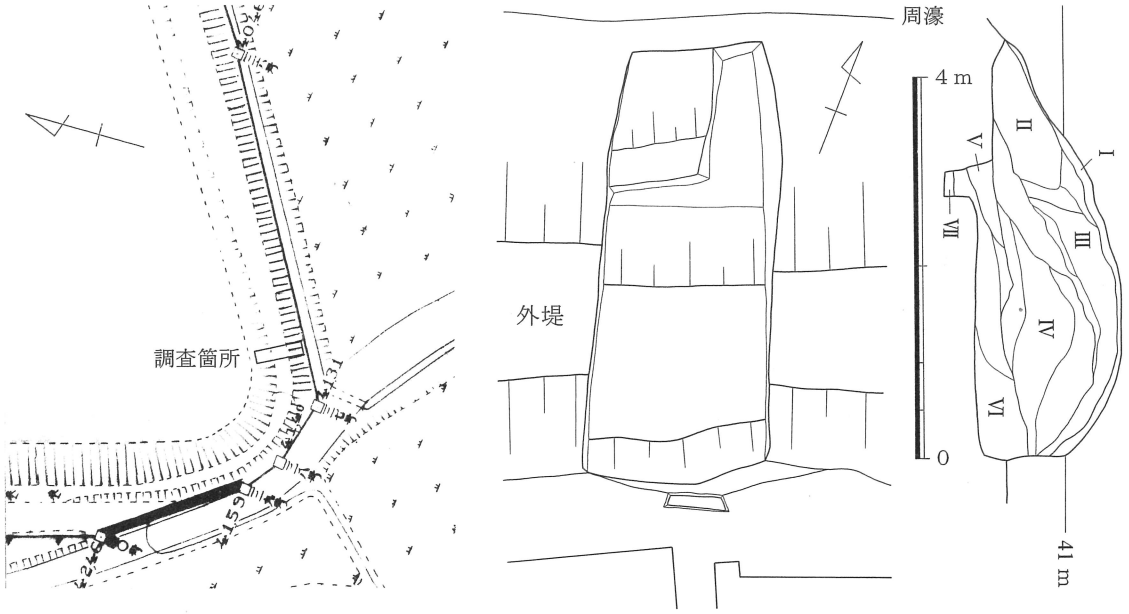
る。22は胴部破片の鰭接合部で、接合のための切り込みがある。23は鰭の破片で、接合面の形状から突帯部分への接合部と考えられる。24は形象埴輪である。平らな破片で、端部に沈線が１条確認できる。器種の特定は難しい。（清喜裕二）

## 清寧天皇陵外堤公共用水路設置工事箇所の立会調査

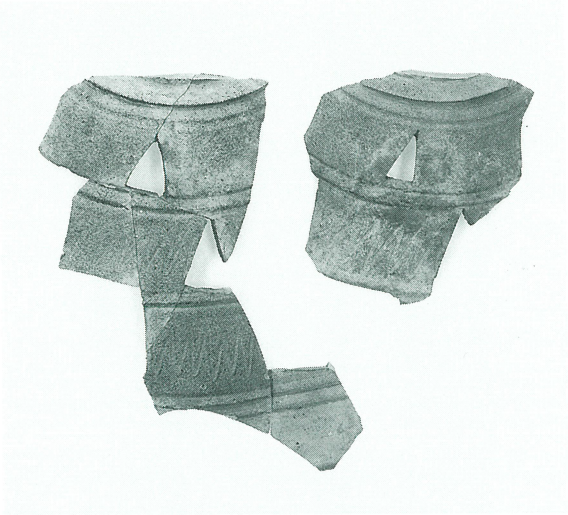
本陵は、大阪府羽曳野市西浦６丁目にあり、主軸を東北東に向ける前方後円墳である。南北に延びる羽曳野丘陵の東縁辺部の傾斜地上に築かれているため、周濠は渡土堤によって２段に区切られている。傾斜地ということで、以前から羽曳野丘陵上から流れ出る雨水などが周辺地域に集中していたが、その緩和策の一環として本陵周濠内に雨水等の一部を引き入れることとなった。そのための導水管を設置するため、平成13年５月14～18日の間に本部職員が立会い、それ以外の工事期間中は監区職員が立会い、遺漏のないように努めた。

調査箇所は外堤南西隅にあたり、長さ4.7m、幅２m、深さ最大1.8mを、外堤を断ち割る形で掘削した（第31図）。掘削の結果、大きく７層（Ⅰ～Ⅶ層）に分けられた。Ⅰ層は表土、Ⅱ層は昭和45年の護岸工事によるソイルセメントとその裏込土である。Ⅲ・Ⅳ層は外堤盛土で灰褐色を基調とするが、Ⅲ層は軟らかく遺物が多く含まれるのに対し、Ⅳ層は均質で堅緻、かつ含まれる遺物も非常に少ないという点で異なる特徴をもつ。Ⅴ層は暗灰色砂が堆積しており、旧濠内堆積土と考えられる。Ⅵ層は外堤盛土である。黄橙色・黄褐色を基調とし、軟らかい。Ⅶ層は、青灰色砂質土で均質な締まった土である。下層の状況を知るため、部分的に掘り下げて確認した。

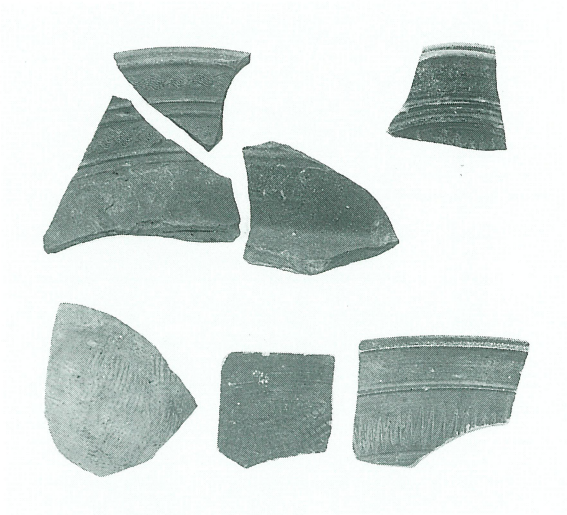
外堤盛土としたⅢ・Ⅳ・Ⅵ層の関係を見てみると、Ⅳ・Ⅵ層は間に濠内堆積土があるため、明らかに時期差をもって盛土がなされたことがわかる。一方、Ⅲ・Ⅳ層の関係は、遺物の含み方、土の堅さなど明瞭な違いが認められるが、時間差があるのか、一連のものであるかの確証は得ら



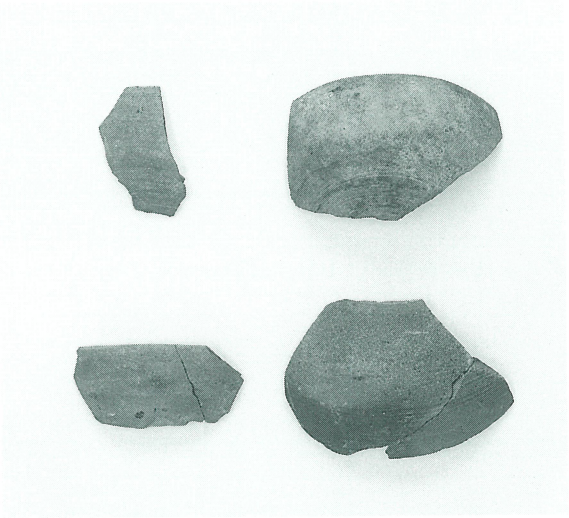

第 31 図　清寧天皇陵　立会調査箇所位置図（1/500）及び平面図・断面図（1/80）



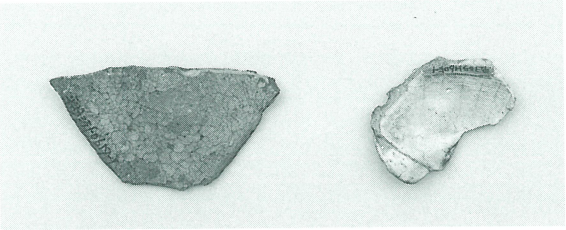
1　白鳥陵出土品 須恵器（筒形器台）



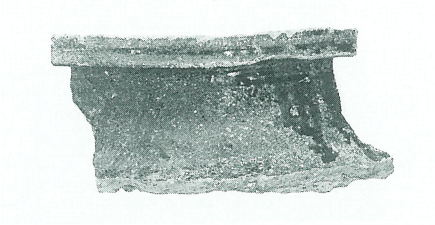
2　白鳥陵出土品 須恵器（甕・壺・器台）



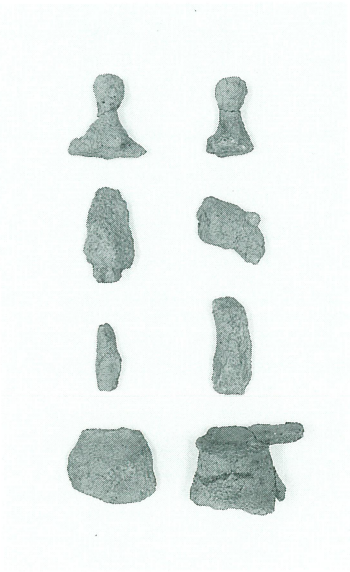
3　白鳥陵出土品 須恵器（杯・壺）



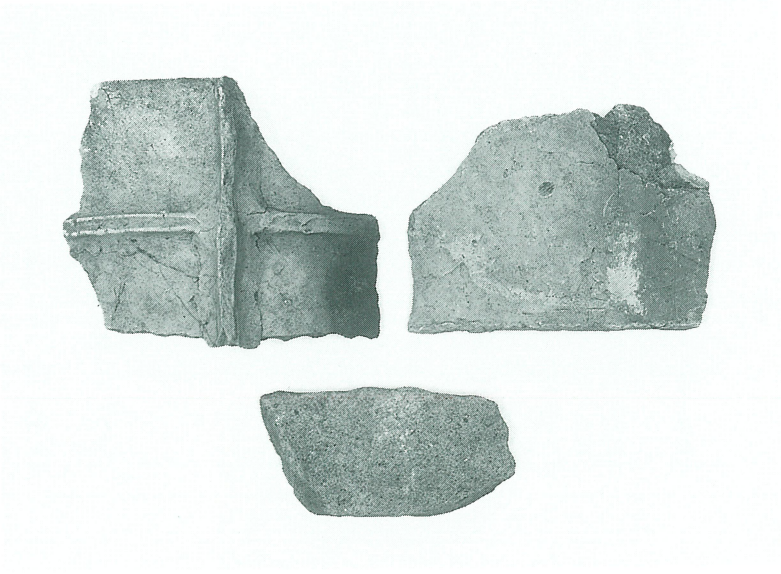
4　白鳥陵出土品 土師器



5　白鳥陵出土品 陶 器（常滑焼）



6　白鳥陵出土品
ミニチュア土製品・土器



7　能褒野墓出土品 円筒埴輪・形象埴輪